

SoulColors

波津木 澄

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ケツイの焰が、変わる……。

目次

S o u l c o l o r s		G e n o c i d e		2 / 2		12
S o u l c o l o r s		G e n o c i d e		1 / 2		8
S o u l C o l o r s		P a c i f i s t				1

Friskは、いいやつだった。これまで隠れてた負い目もあってあんまり表に出れないジブンを引っ張ってくれた。

赤い癖に、いつも誰かのことを考えていた。緑の方が、似合っているのに。

Friskはモンスターに攻撃されても何もしていなかった。掃き溜めからしか見てないけど、確かに優しさを持っていた。話も聞かずに攻撃してくるあの鎧ににらまれながらもモンスターを助けていた。

ずっと、逃げて、隠れていたジブンとは大違いだ。Sansとも仲良くしていたみたいだし、なによりモンスターを地下から解放して見せた。本当に、ジブンとはちがう。

だから、時々不安になる。Friskにとってジブンに価値があるのかどうか、わからなくなる。Sansがジブンに興味をなくして、どこかに行ってしまうんじゃないかって疑ってしまう。

そういう時はいつも掃き溜めに戻っていた。

今日も、そういう日だった。

いつもみたいにこの掃き溜めで天井を見上げて、一日を過ごすようにしていた。

「オイ、そのガキンチョ。こんなところにいたら危ないぞ」

「ちよつとSans、その言い方は……」

けど、なんでかSansとFriskが少ししてからやってきた。訳が分からない。二人には、こんな場所似合わないのに何でいるんだろう。

そんな思いが顔に出たのか、二人は答えてくれた。

「へへ。Papyrusがオマエとパズルがしたいんだと」

「ちようど4人でやるパズルだったからね」

へえ、と生返事を返してからふと考えてしまう。

「Andyneでも呼んだらよかったじゃん」

何か二人がきよんとしている。訳も分からずに不思議に思っ

いると、なぜだかAndyneにも言ったがデートだと断られたと言葉が返ってきた。

「どうやらジブンは口に出してしまっただけだ。最悪だ。普段はこんなことしないのに。」

けれど、Andyneはもう誘った後だったのか。そうか。ジブンは、結局、数合わせ程度なんだろう。そう思うとなんだか急に気持ちが沈む。

「ごめん。今日はこのあとやることがあってさ」

思わずそう言って断ってしまった。二人は次に誰を誘うかの相談をしている。音を立てずに掃き溜めを離れた、もう、ここにもいられないから二度とこないと心に決めた。

グダグダと適当に歩き回って、結局夜になってからたどり着いたSnowdintownから大きく外れた森の中で寝てしまった。

次の日に意識が浮上するが、どうにも体に力が入らない。頭も妙に浮ついて思考も定まらない。

昔もこんなことになったことがあるが、その時は確か動けもせず寝てばかりだった。気が付いたら何ともなくなっていたから、今回もきつとそうだろう。そう思って重い瞼を閉じる。あたりに降り注ぐ雪が冷たくて、気持ちがいい。

浮ついた頭がまた自意識を取り戻す。目に映るのは見覚えのない茶色。近くで何か音がする。何だろうと思つて顔を動かすけれど、何かの陰しか見えない。けれどその影が少しずつジブンの体を起こす。口の中に入れられた冷たいなにかをされるがままに飲み込んで、ようやく意識がはつきりとしてきた。

今いる場所に見覚えはないが、どうやら隣にいるのはSansらしい。最初に見えた茶色はきつと天井の色だ。

「Sans。なんでジブンはここに？」

「…………オマエが森で倒れてたからな。オイラの部屋まで運んだんだ」

「へえ。ここがSansの部屋なんだ」

まだすこし浮つく頭で会話を続ける。少しするとFriskとPapyrusが部屋に入ってきた。Papyrusはパスタの乗ったお皿を手に持っている。

二人ともジブンを見るなり心配したと言ってくれ。一先ずありがとうと言う。二人はなんだか不思議そうな表情をしている。

「へへ。まあ無事ならいいけどよ」

「うん。大丈夫」

ニンは、結構頑丈だ。すぐに傷つくけれど、中々死なない。ジブスが、一番知ってる。確かにまだ少し頭は浮つくし、力も入り辛いけれど、動けないほどじゃない。死ぬほどでもない。だから大丈夫だ。

笑って、大丈夫だと伝える。

「……Papyrus。オイラもパスタが食べたくなかった。もうお腹と背中がくつつきそうでき。頼めるか？」

「二エ？ 兄ちゃんそんなにお腹が空いていたのか!? 任せろ！ このオレさまが完璧なパスタを作ってるよ！」

Papyrusが猛ダッシュで部屋から出ていく。Friskはどうしたらいいのかからずに迷っているようで、オロオロしている。というか待って。スケルトンにお腹と背中ってあるのか？

「…Frisk。Papyrusを見ていてくれるか？」

Sansの言葉を受けてFriskは渋々と言った形ではあるが従うことにしたようで、静かにドアを開けて出ていく。これで、この部屋にはもうジブんとSansの二人だけだ。

「なあ…オマエさん、何をそんなに焦ってるんだ？」

「焦る？」

どういう事だろうか。焦るって一体なんなんだ。ジブンは焦ったりなんてしていない。いつも通りだ。そう伝えようと思っているのに、なぜだか言葉が出ていかない。

Sansは確かに少し怒ったような雰囲気を出しているが、言葉に詰まるほどの威圧感ではない。それにもかかわらず、ジブンは何も言えずにいる。ダメだ。この調子では。早く何かを言わなくては…。

「オイラは、オマエさんとそれなりに過ごしてる。だからわかるんだよ」

Sansがいつになく真剣な眼でジブンを見つめる。その眼を見ることができず思わず顔を逸らしてしまう。

「今のオマエさんは、何かに焦ってる。……………恐れてるって言いかけてもいい」

焦って、恐れている。Sansに言われた言葉が頭の中をグルグルと駆け巡る。自問自答しようにも、答えは一向に出てこない。

ジブンは、いったい何を恐れているのだろうか。死ぬこと？ バカ言え。いくらジブンがニンゲンだからって、この程度の不調で死ぬはずがない。じゃあ、何を。

いつもいつも逃げ隠れることしかしてこなかったジブンには、自身のことすら立ち向かうことができない。

「……………ハハ。ジブンは大丈夫だよ、Sans」

「いいや。大丈夫じゃないね」

……………普段Sansは面倒くさがりだ。だからこうしてはつきりと否定をいうことも少ない。適当に言葉を濁して、論点をずらしてのらりくらりと躲していくのが普段のSansだ。

それなのに今はこうしてはつきりと否定して、自分の意見を通そうとしている。本当に、珍しいことだ。

さすがに、もう誤魔化しもできない。

「ちよつと、ね。ジブンなんかみんなと仲良くなる価値があるのかになって、思っちゃって」

「……………」

Sansは何も言わない。とりあえず話してみろ。そういう事だろう。

「や、ほら。ジブンのケツイって白いでしょう？ これってつまり”何も無い”ってことだからさ。それに、ずっと逃げ隠れてたわけだ

し。ずっと、偏見だけで、モンスター君たちを見てた。それって…最低なことだろ?」

「……………」

Sansが少し考えるように目を閉じた後でゆっくりと口を開く。

「バカか? オマエさん」

「…はえ?」

真剣な話をしていたというのに、この骨は一体何を言っているのか。まるで分らなくて思わず変な声が出てしまった。

が、そんなことはどうだっていい。このスケルトンは一体何を言っているんだ。

「オマエさんは、オイラの親友だ。違うか?」

「え、そりゃ、ジブンだってそうありたいって思ってるけど」

「だったら、少なくともここにいるオイラはアンタと仲良くなりた  
いって思ってるわけだ」

うん? いや、まあ。たしかにそう言える。けどそれがどうしたつて言うんだ。

「オイラは、アンタと仲良くなりたんだ。それなのにアンタはアン  
タ自身を卑下してる。つまりオイラの親友を。オイラの価値観を貶  
すってのか?」

「そ、そんなつもりは全くないよ!! ジブンはただ、ジブンが——」

「兄ちゃんの言う通りだぞ! ニンゲン!!」

バン! と大きな音を立ててドアが開かれる。見てみれば P a  
p y r u s と F r i s k がドアの先に立っている。F r i s k は少し  
申し訳なさそうだ。

「兄ちゃんにスケルトンだからお腹も背中もないだろうって言いに来  
てみれば、ニンゲンはそんなことで悩んでいたんだな!」

ずかずかと、いかにもと言わんばかりの怒りのオーラを纏った P a  
p y r u s が近くに来る。バトルスーツの圧が普段の何倍にも膨れ  
上がっている。

「ニンゲンは! 最高にグレートでクールなオレさまの次に頭がいい  
んだ! それにずーっと一人でいるなんてオレさまには耐えられな

いぞ！」

真正面からの言葉にはなれていなくて、逃げようと顔を動かしてみれば P a p y r u s の後ろで F r i s k が首を縦に振っているのが見える。

「……………なんだ、これは。一体何が起きているんだ。もう何が何だかわからない……………」

「ケツイの色って、どうなってるの?」

「え、つと。話を聞く限りだけど、自分のためのケツイが、赤。誰かのためのケツイが、緑。誰の為でもないケツイが、青。……………のはずだよ」「つまり、白い君はまだこれから何色にもなれるってことだね! それって素敵なことじゃない?」

F r i s k がジブンの持ちだしたケツイの色について、褒めてくれる。P a p y r u s はジブンについて褒めてくれた。

この少しの時間だけでジブンの物差しが壊れているような気がしてくる。

「へへ。これでさらに二人。オマエさんを認めてるってことになるな。…なあ、オマエさんは、オマエさんを見つめているオイラ達のことを信用できないのか?」

「そんなわけがないだろう!」

強く、強く否定する。F r i s k は地下世界を救って見せた救世主だ。P a p y r u s は希望を持たせてくれるリアルスターだ。S a n s はかけがえのない親友だ。それを信用できないはずがない。

「じゃあ、オマエさんを信じるオイラ達を信じろ」

「……………。。ジブンは、ニンゲンが嫌いだ。もちろんF r i s k は違うってわかるけど、ニンゲンってのは自分の利益の為に平気で誰かを蹴落とす」

「ああ、そうらしいな」

「ニンゲンは、自分の娯楽の為に誰かを貶すし、殺す。そんなニンゲンである、ジブンが、もっと嫌いだ。そんなニンゲンの力を借りないと、ジブンの価値を見出せないジブンが、なによりも嫌いだ」

「それがどうした。オイラ達はオマエさんがそんな奴だとは思わない

ぜ」

三人とも、嘘偽りのない、真剣な眼でジブンを見ている。

「そんなジブンでも………いいの？」

「オイラはオマエさんだから親友になりたいんだ」

「オレさまはニンゲンを信じているぞ！」

「ボクは、キミがキミ自身を好きになれるように応援するよ」

三人が、手を差し伸べてくれる。ジブンは、価値のないニンゲンだ。いまだって、変わらずにそう思っている。

けど、この三人なら。

この三人が信じてくれる自分なら、信じてみても、いいかもしれない。

「ヒヒヒッ。……皆、ありがと」

——ケツイが灯る。

自分のために。自分を信じてくれるこの三人のために。自分自身を信用する、ケツイを抱いた。

焰の色が、変わる。

最近、何人目かのニンゲンが落ちてきた。落ちてきたニンゲンは全員、例外なくAsgore王に殺されている。そしてソウルを抜かれて……。オイラ達みたいなモンスターのために利用させられる。

大昔にニンゲンとの戦争で多くのモンスターが犠牲となり、さらには地下に閉じ込められた。それに、王子を奪ったのだからニンゲンらしい。それを受けてオウサマはニンゲンを皆殺しにすると宣言した。だからこそニンゲンに恨みを向けるモンスターは多い。

けれど大半はその具体的な理由を知らず、またニンゲンの姿も知らない。弟だって例外じゃなく、その姿を知らない。……Papyrusの場合は恨みじゃなく、自分がロイヤルガードに入るために捕まえようとしているんだったか。最近じゃニンゲンとも仲良くなれるかもなんて考えてるらしいぜ？

「それ、ジブンに言っただろうのさ」

目の前にいるぼろ布を被って体を一切晒さないヤツは呆れたと言わんばかりの態度だ。もつとも、顔すら隠されてるから気づけるのは長年の付き合い故ってトコだな。

フードのように加工された穴からは白色の炎が覗いている。けれどヤツはGrillbyのような炎のモンスターではない。覗いている炎はヤツの”ケツイ”を表すものだ。とはいえ、具体的な目的のないただの漠然としたソレらしいがな。

「いや？ オイラの弟は最高にクールだろ？ って話だ」

「……………確かに君の弟は話を聞く限り相当にクールなモンスターみたいだね」

「だろ？ だったらどうだ。ここはひとつオイラの家まで——」

来るか？ とそう続けようとするがその前に手で遮られる。やっぱり、まだダメらしい。

仕方なしに肩をすくめてヤツの住むごみの山から下り、”近道”を

使う。目を開けばそこは普段過ごしているオイラの部屋で……。

またオイラはヤツのことを考え始める。

「全く、スケルトンのオイラに骨の折れるほどに面倒なことを頼みやがる……」

ヤツは、ニンゲンだ。だからいつものようにオイラは話しかけて、ロイヤルガードに入ろうとしている弟の話をした。アイツはこれまでのニンゲンと違って強い気持ちを持っていなかった。

”お願いだ。モンスタ<sup>君</sup>スター<sup>たち</sup>に迷惑をかけないから見逃してくれ”そう言われてあの場所を紹介してしまった自分が嫌になる。アイツとなら、仲良くだつてなれる気がするのに。

真つ赤なソウルを持ったニンゲンが新しく落ちてきた。そのニンゲンがモンスターたちと友達になって、そしてその様子を見たヤツもついに重い腰を上げた。

これでようやくPapyrusにオイラの最高の友達を紹介できる。

「よお。こつちを向いて握手しな」

「いつかの焼き増しかい？ 悪くない」

そういいながら振り返って勢いよくオイラの手をヤツは握る。SnowdinTownにブーブークツションの音が鳴り響く。

普段よりも音量が高く、不思議に思ってみればヤツの手からもオイラの持つそれと同じものが出てきた。

「へへ。オマエさん、中々いいシユミしてるな」

「ヒヒヒ。オタクもそうだろ？」

二人して笑い、Friskが新しいSnowdinTownの住人に気付く。Papyrusが家から飛び出してきてオイラの隣を見て目を見開く。他のSnowdinTownの住人も、なんだなんだと集まってきて、気が付けば包囲網が出来ちまつてる。

ここまで集まってきたら、逃げることもできないだろう。今更逃げ

道をふさがれたことに気付いたヤツが慌て始める。それを見てもう一度笑い、フードを無理やり剥がす。

そうして周りの全員が新たなニンゲンの登場に驚く。これで本当に逃げ道はない。

「へへ。紹介するぜ。こいつはオイラの友達…。いや、親友さ」

恨むから、と隣から聞こえた気がするが、オイラは聞く耳持たないからな。スケルトンだし。

少しすると諦めたようにそいつの自己紹介が始まる。

「ジブンは見ての通りニンゲンだけど…えっと、よろしく」

そんなこんなで、Friskが落ちてきてくれたことよってモンスターたちは地下から解放され、ヤツは孤独から解放された。

そのはずだった。

最悪だ。最悪だ。最悪だ。最悪だ。

真つ赤なケツイを抱いたあのクソガキが時間軸を滅茶苦茶にして、オマケにオイラが微かに覚えてる限りでも数十回はモンスターを救っては殺しつて行動を繰り返していやがる。

ああ糞が。みんなで地上に出ることができて、仲良く暮らしました。それでいいだろうが。なんでわざわざ滅茶苦茶にするんだ。

クソガキはオイラに殺され続けて諦めたかと思えば、思い出したみたいに皆殺しを始める。本当に訳が分からない。あのクソガキは一体何がしたいってんだ。

おまけにクソガキの行動を把握する頃には軒並みもう手遅れになっている。訳が分からない。

でも、一つだけはつきりしてる。あのクソガキはPapyrusを殺した。そんな奴をオイラが——オレが、許せるはずがないんだ。

きつと、こいつをケツイと呼ぶんだろう。そうはつきりとわかるくらいにはオレは今、ケツイに満たされている。

慈悲は、絶対がない。

クソガキの振るナイフがオイラに突き刺さり、抜ける。

どれだけオイラがランダムに行動しようが、規則性はあるみたいでこいつは一切迷いなく避けてきやがった。

一体、それだけのパターンを割り出すのにどれだけやり直したのかはわからないし、わかりたくもない。

……こんなに、動いたのは久しぶりな気がする。Grillby'sで休みたい。ああ、Papyrus。お前も来るか…？

そう言つて、PapyrusとGrillby'sに向かって歩く

が、すぐに限界がきて崩れ落ちてしまう。

——最後に、懐かしい白の炎を見た気がした。

今、目の前で親友が死んだ。初めてできた友達だった。

時がたつにつれて、だんだんと親友になれたと思っていた。

あんな掃き溜めじゃなく、ちゃんとした場所で話し合いたいって思ってた。弟にだって、会ってみたいと思っていた。臆病なジブンは、結局できなかつたけれど、まだ可能性はあつたはずだ。

けど、どれも今できなくなつた。それも目の前にいるニンゲンのせいだ。

殺してやる。

ケツイの炎が赤黒く染まる。視界が真っ赤に燃え盛る。

思考が弾け、気が付けばすでに拳を振りぬいていた。ニンゲン——否、化け物はまともに食らつて大きく跳ね飛ばす。

さあ、戦闘開始だ。

化け物がナイフを振りぬく。知つたことか。体に切り傷が刻まれるが関係なしにまた殴る。今度は避けられた。

化け物がナイフを振る。ケツイを青く染める。化け物の体はなにかに引つ張られるかのようにして壁に叩きつけられる。

化け物が跳ぶ。ケツイを黄色に染める。いつか親友がくれた空っぽのピストルの中から出る弾丸が化け物を撃ちぬく。

化け物が走る。ケツイを紫に染める。化け物は亀裂の上しか走れなくなつた。

化け物がナイフを投げる。ケツイを水色に染める。ナイフは少ししか刺さらなかつた。

化け物があがく。ケツイを緑に染める。ジブンの体にあつたはずの傷が無くなつた。

化け物がケタケタと愉快そうに笑う。ケツイを橙に染める。化け物を殺すだけの勇気を抱いて、拾つたナイフを振りぬいた。

殺したはずの化け物が笑う。殺す。また化け物が笑う。殺す。化け物が嗤う。殺す。嗤う。殺す。嗤う。殺す。

殺して、殺して、殺して、殺して、殺して。でも化け物は諦めない。気持ち悪い。殺す。

「なあ、こんなことをして何になる？」

化け物は何も言わずにナイフを振りぬく。

「お前のその赤いソウル……一体何をケツイした？」

化け物は答えない。振るわれるナイフを撃って弾く。

「ジブンの感覚じゃ、ソウル……ケツイは、自分本位のを抱くにつれて赤くなるはずだが」

化け物は応じない。地面に打ち付ける。

「おい、答えろよ」

何も言わない。手を撃つ。

「答えろ！」

何も言わない。………脳天を貫く。

攻撃を全て避けられる。まるで知ってるみたいに化け物は動く。

こっちはまるで覚えがないのに、誰かを殺したって感触が付きまとうのが気持ち悪い。

気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。

なのに化け物はケタケタと嗤っている。

今すぐ殺す。絶対に殺す。許しはしない。慈悲はない。殺す。殺して殺して……何度だって殺してやる。

ケツイが赤黒く染まる。そのケツイを乗せて奪ったナイフを振りぬく。

しかしそのナイフも宙を切った。化け物の拳が伸びるのを見てケツイを水色に染める。染まり切る前に殴られて吹き飛ばされた。

頭を振って前を見れば目の前に紅く染まったナイフが――

